

『ナルニア国年代記物語』における鳥のシンボリズム

川原 有加

日本大学大学院総合社会情報研究科

Symbolism of Birds in *The Chronicles of Narnia*

KAWAHARA Yuka

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

This paper is a study about the symbolism of birds in C. S. Lewis's *The Chronicles of Narnia*. In this fantasy novel, we can find many birds. It seems that each bird plays an important role in the story. The birds in *The Chronicles of Narnia* are classified into five kinds. First, some birds guide the characters into other worlds. Second, other birds appear before and after the appearance of Aslan the Lion. Third, there are talking birds. Fourth, Aslan transforms into an albatross. Finally, Tash, a god for Carolemen, looks like a bird.

On the one hand, some birds are agents of Aslan, and one of them or the albatross represents Aslan himself on the other. It is only Tash who opposes Aslan.

In conclusion, C. S. Lewis expresses his faith and his views of man and the world by the symbolism of birds.

序

『ナルニア国年代記物語』(*The Chronicles of Narnia*, 1950-1956)は、C.S.ルイス(Clive Staples Lewis, 1898-1963)が作家としてだけでなくキリスト教徒として、自分の言わずにいられないことを表現することを目的として書いた全七巻から成る作品である。物語には、現実世界とは異なる別世界ナルニア国の誕生から終焉までが描かれている。ライオンのアスランが物語の中心的存在として登場し、アスランと登場人物らが別世界ナルニアにおいてさまざまな出来事に直面していく展開である。それは、主な登場人物である子どもたちの冒険物語を通して、子どもたちの成長を描きながら作品の中心的主題となる善と悪との闘争の要素を含みもつ物語となっている。ルイスは、自分の言わずにいられないことを作品中に反映させていくためにファンタジー形式を用いている。彼は、人間としての自分の信仰ないし世界観を作家としての自分の技法を駆使して表現しようと

している。技法上の特徴の一つはシンボリズムであり、その効果的な使用は作品を魅力的なものにしている。

『ナルニア国年代記物語』全七巻には実に多様なシンボリズムが見られるが、その中の一つに鳥のシンボリズムがある。作品中には様々な鳥が登場している。鳥は物語の出来事の前後に現れ、場面の意味合いを暗示する。

本稿では、各作品における鳥を役割に応じて五つに分類し、それぞれの場面を吟味しながら、ルイスがいかにか自らの世界観を反映させるべく鳥を導入しているかをシンボリズムの観点から考察する。

1. 別世界に導く鳥

『ライオンと魔女』(*The Lion, the Witch and the Wardrobe*, 1950)の第1章では、ピーター、スーザン、エドモンド、ルーシィがカーク教授の家に疎開してきた日の夜、外から聞いたことがない音が彼らに聞

こえてくる。その音について「ただの鳥」と簡単に答えるエドモンドに対して、ピーターがいろいろと想像をめぐらす。

“It’s an owl,” said Peter. “This is going to be a wonderful place for birds. ... You might find anything in a place like this. Did you see those mountains as we came along? And the woods? There might be eagles. There might be stags. There’ll be hawks.” (LWW p.5)¹

この場面は、子どもたちがまだ別世界ナルニアに入っておらず、現実世界での出来事である。夜ということもあって、ピーターは夜行性であるフクロウを想像している。しかし、それ以上にピーターはこの森が鳥にとってすばらしい場所であり、ワシやタカなど他の鳥がいることを想像している。森に住む動物ということでルーシィはアナグマを、エドモンドはキツネを、スーザンがウサギを想像しているのに対し、ピーターだけが鳥を想像している。これは、ピーターが思い描いている森には鳥の存在が欠かせないことを表している。つまり、最初に出版された

この作品の第一章において、作品全体の鳥の重要性が暗示されている。

ピーター、スーザン、エドモンド、ルーシィの四人の子どもたちがそろって別世界のナルニアに入ったとき、子どもたちを奥へ導いていくのは赤い胸のコマドリである。最初、ルーシィがこのコマドリを見て、このコマドリは話ができるのではないかと思いい、コマドリに話しかける。コマドリは何も話さないが、子どもたちの話していることが分かっているような動きをする。それを見て子どもたちはコマドリに近づいていく。

At this the Robin flew away again to the next tree and once more looked at them very hard. (You couldn’t have found a robin with a redder chest or a brighter eye.) ... It kept going from tree to tree, always a few yards ahead of them, but always so near that they could easily follow it. In this way it led them on, slightly downhill. Wherever the Robin alighted a little shower of snow would fall off the branch. (LWW pp.60-1)

このコマドリはイギリスの国鳥²であるヨーロッパパロビンである。ヨーロッパパロビンは、胸が赤いのが特徴であり、テリトリーに侵入しようとするものがあると胸の赤い部分を相手に見せて囀る³習性がある。ここでは、ナルニア国に入ってきた子どもたちを悪しき侵入者としてではなく、歓迎の意味でコマドリがさえざっていると考えられる。そのことは、これほどまでに胸が真っ赤で、きれいな目のコマドリはこれまでに見たことがない、という語りによって現実世界のコマドリとは少し違う別世界ナルニアのコマドリであることから分かる。因みに、コマドリの胸は、キリストの額から落ちた血が羽毛を赤く染めたとされ、胸の赤いコマドリは幸福のメッセーを伝える神の小鳥となったという民話もある⁴。

¹ 本論文において *The Chronicles of Narnia* (『ナルニア国年代記物語』) の引用は下記の〔使用テキスト〕を用い、引用箇所は括弧内に下記の略語と引用ページ数を示す。

〔使用テキスト〕

The Chronicles of Narnia

1. LWW - C. S. Lewis, *The Lion, the Witch and the Wardrobe*. New York: Harper Collins Publishers, 1994.
2. PC - C. S. Lewis, *Prince Caspian*. New York: Harper Collins Publishers, 1994.
3. VDT - C. S. Lewis, *The Voyage of the ‘Dawn Treader’*. New York: Harper Collins Publishers, 1994.
4. SC - C. S. Lewis, *The Silver Chair*. New York: Harper Collins Publishers, 1994.
5. HHB - C. S. Lewis, *The Horse and His Boy*. New York: Harper Collins Publishers, 1994.
6. MN - C. S. Lewis, *The Magician’s Nephew*. New York: Harper Collins Publishers, 1994.
7. LB - C. S. Lewis, *The Last Battle*. New York: Harper Collins Publishers, 1994.

² 吉井正監修『三省堂 世界鳥名事典』、三省堂、2005年、529ページ。

³ 同上、529ページ。

⁴ 十字架につけられたキリストのイバラの冠から頭にささったイバラの棘を抜こうとした駒鳥の胸にキリ

ルイスは、このような胸の赤いコマドリに纏わるイメージを用いてナルニアの世界へ導く重要な役目を与えるかたちで、読者のうちにナルニアへの関心を引き起こしながら彼の信仰の一端をそれとなく注ぎ入れているのである。

コマドリは、子どもたちが見失うことがないように順番にとなりの枝に移りながら、子どもたちを少しずつ奥へと導いていく。この様子にはコマドリの使命感と優しさが表れている。また、コマドリの止まった枝からは雪しずくが落ちていく。これは、ナルニアの世界が魔女の支配力でずっと続いていた冬から春への季節の変化を表している。子どもたちはこのコマドリについて信頼できるのか疑問を感じるが、コマドリの美しさと行動から、結局、三人の子どもたちはコマドリを信じてついていく。だが、エドモンドだけはこのコマドリを信じようとはしない。ピーターとエドモンドは次のように言い争う。

“ That’s a nasty idea. Still—a robin, you know. They’re good birds in all the stories I’ve ever read. I’m sure a robin wouldn’t be on the wrong side. ”

“ If it comes to that, which *is* the right side? How do we know that the Fauns are in the right and the Queen (yes, I know we’ve been *told* she’s a witch) is in the wrong? We don’t really know anything about either. ” (*LWW* pp.61-2)

ピーターは、純粹にコマドリを良い鳥として捉え、コマドリは悪者についていることはない主張する。一方、エドモンドはコマドリを素直に良い鳥だと思いうことができない。このとき、エドモンドはすでに魔女に会っていたので、それによりエドモンドは魔女の悪い影響を受け、ものごとの良し悪しの判断が出来なくなっているのである。やがて、子どもたちは、コマドリの導きによってピーター夫婦に出会う。ピーター夫婦からはライオンのアスランについて初めて話を聞く。後に子どもたちはアスランと出会う

ストの血が一滴落ちて、胸の羽毛を赤く染めたというイギリスやフランスの民話として伝えられている例がある（日本民話の会、外国民話研究会編訳『世界の鳥の民話』、三弥井書店、2004年、42-44ページ）。

ことになる。このように見てくると、この胸の赤いコマドリは、ナルニア世界へ導くのにふさわしく、これからの物語展開を左右する役割を果たしている鳥であると言える。

『銀のいす』(*The Silver Chair*, 1953)においては、別世界ナルニアに入ったジルとユースティスが今まで聞いたことがないような鳥の声を聞く。彼らもまた鳥の声によってナルニア世界の中に導かれていく。

Instantly there was a quite different sound all about them. It came from those bright things overhead, which now turned out to be birds. They were making a riotous noise, but it was much more like music—rather advanced music which you don’t quite take in at the first hearing—than bird’s songs ever are in our world. Yet, in spite of the singing, there was a sort of background of immense silence. That silence, combined with the freshness of the air, made Jill think they must be on the top of a very high mountain. (*SC* p.13)

鳥の声は、それまで聞こえていた周りの音とは別の音で、頭上のきらきらしたところにある美しい空から聞こえてくる。また、その声は音楽のようで、途切れることがなく流れるような声なのである。鳥ははげしく鳴いているが、あたりには静けさが広がっている。これは、鳥の声がうるさい音ではなく、心地よさをもたらしていることを表している。その静けさによって、ジルは高い山の上にいるにちがいないと考える。高い山の上は、静かですがすがしい空気が漂い、声が聞こえてくる場所であり、音楽のような声、周りの様子も含めて、ジルがいるこの場所は美しく神聖な場所であることが推測される。そして、ジルが高い山の上にいるにちがいないと考えたことは間違いではなかったことも後で明らかになる。この高い山の上は、実は地上のナルニアの中におけるまことのナルニアの世界なのである。地上のナルニアの中のみことナルニアの世界という特別な場所において、鳥の声が静けさの中に響き渡っているのは、ルイスが鳥の声に対して清らかなイメージを抱いていることが考えられる。『銀のいす』に

における別世界でのジルとユースティスの物語は、この高い山の上から始まる。ジルが聞いた前衛音楽のような鳥の声は、この物語の始めを告げる合図のようなものなのである。

『馬と少年』(*The Horse and His Boy*, 1954)では、鳥が少年シャスタを現実世界から別世界に導いているというのとは少し異なるが、鳥の声の響きは今までシャスタが経験していた世界とは別の世界を知った瞬間であるといえる。鳥はアスランが道に迷って途方に暮れているシャスタの耳にどこからともなく鳥の鳴き声が聞こえてくる。暫しシャスタはアスランと話し、アスランの偉大さに気づく。しかし、やがてアスランは消えてしまい、シャスタは馬と共にとり残される。その時、またどこかで鳥がさえずっているのが聞こえる。鳥は「どこか」で鳴いているが、鳥の姿も見えず、鳥がさえずっている場所も特定されていない。これは、いつも知らない間に消えてしまい、姿が見えなくなるアスランの行動に似ている。また、鳥のさえずりも、歌をうたいながらナルニア国を創造したアスランを連想させる。この場面はシャスタがアスランに出会い、アスランの存在に気づいたシャスタは、それまでと違うアスランの世界へ導かれていると考えられる。つまり、その意味ではアスランとの出会いは、シャスタにとって今まで体験したことがない別世界への導きであり、鳥はシャスタをその別世界へ導く手助けとなっている。

さらに、『魔術師のおい』(*The Magician's Nephew*, 1955)では、ディゴリーがアスランの命により、西の園にりんごを採りに行き、食べてはいけないというりんごを食べようとしたとき、ディゴリーの頭上に一羽の鳥が止まるという場面がある。

There, on a branch above his head, a wonderful bird was roosting. I say "roosting" because it seemed almost asleep; perhaps not quite. The tiniest slit of one eye was open. It was larger than an eagle, its breast saffron, its head crested with scarlet, and its tail purple. (MN p.172)

この鳥は、片目だけわずかに開き、ディゴリーの様子を観察している。ディゴリーはこのとき、とっ

てはいけないうりんごをとりそうになり、誘惑に負けそうな心理状態に陥る。だが、ディゴリーはこの鳥を見て、我に返るのである。これは、この鳥が観察している様子とこの鳥の姿に関連していると考えられる。この鳥は、ワシよりも大きく、胸はあざやかな黄色で、真っ赤なとさかで、紫の尾羽をつけているすばらしい鳥であると描かれている。ここでの 'scarlet' は、高貴さを帯びた真紅色で肯定的な意味合いで用いられている。この場所もナルニアの中にあるまことのナルニア世界である。この鳥は、ディゴリーを直接に別世界へと導いているわけではないが、ディゴリーにこの場所の神聖さとアスランとの約束を気づかせる重要な役割を果たしている。

『さいごの戦い』(*The Last Battle*, 1956)には、まことのナルニアの世界で果樹園の真ん中に不死鳥(Phoenix)が登場する。不死鳥は、エジプト神話に登場する鳥⁵であり、その意味合いからもまことのナルニアの永遠性を暗示する。『魔術師のおい』に登場する鳥は、不死鳥という語は直接使っていないが、一羽でやどっている姿や色合いなどから、まぎれもなく不死鳥であり、まことのナルニアにいる鳥と同じである。不死鳥は、地上のナルニアが誕生した時の物語である『魔術師のおい』において登場し、『ナルニア国年代記物語』の最後、まことのナルニアにおいて再び登場する。不死鳥はまことのナルニアを象徴する鳥であり、永遠に続くナルニアの世界の存在を示している。この点に、この世を越えたところにある実在に対するルイスの信仰の現れを見ることができる。

別世界に導く鳥は、鳥が持つ超越的な印象を活かし、別世界との架け橋としての役割を果たしている。

2. アスランとの出会いを予期させる鳥

作品中では、鳥によって周囲に変化が起こったり、また、周囲の変化を示すきっかけとなる鳥が現れる。

⁵ エジプト神話にでてくる不死鳥は、ワシよりも大きく、輝いた金色で、赤く紫の羽をしており、500年ごとに自らを焼死させ、その灰の中から生き返るという霊鳥のことで、不死や復活の象徴とされている。(Martha C. Sammons, *A Guide through NARNIA*. Illinois: Harold Shaw Publishers, 1979, p.135.)

『ライオンと魔女』において、魔女、小人、エドマンドが冬から春への変化を感じたとき、いきなり一羽の鳥がさえずり始める。そのさえずりは、雪解け水が流れている川の水の音よりもきれいな響きである。一羽の鳴き声に呼応してあらゆる方角から鳥たちがさえずる。たくさんの鳥が羽ばたき、森じゅうに鳴き声が音楽のように響きあう。これは、あたり一面に春が訪れ、魔女が支配する冬の世界から春への季節の変化を明らかにし、その後のアスランの到来を予告している。

また、アスランが魔女に捕らえられ、謀殺された後、ねずみたちがアスランを縛っている縄を噛み切り、ルーシィとスーザンがその縄をほどく場面で、二人の背後の森から一羽の鳥が鳴き始める。その鳴き声を聞いて、他の鳥もさえずり、山全体に鳥の声が響き渡る。その後、アスランの復活の瞬間が訪れる。この鳥のさえずりは、アスランの復活の前兆となり、アスランを讃えている。

『カスピアン王子のつづえ』(Prince Caspian, 1951)において、森で野宿をしていたルーシィが目覚めて森の中へ入っていくと、甘い香りがただよっていて、近くで一羽のナイチンゲールが鳴き始める。

Somewhere close by she heard the twitter of nightingale beginning to sing, then stopping then beginning again. ... but the moonlight and the shadows so mixed that you could hardly be sure where anything was or what it was. At the same moment the nightingale, satisfied at last with his tuning up, burst into full song. (PC p.116)

ルーシィは月明かりが照らし出している方へ進んでいくと、ナイチンゲールはさらに歌いだす。風もないのに、周りの木々の葉ずれの音が聞こえてくる。それを聞いたルーシィは、木々と話がしたくなり、いざ話そうとしたとき、ナイチンゲールは鳴くのをやめてしまう。結局、ルーシィは木々と話すことができず、葉ずれの音は静まり、ナイチンゲールはまた鳴き始める。

翌日、ルーシィは、一人だけ山の上にアスランの姿を見る。ルーシィはそのことをみんなに話すが、

みんなには信じてもらえない。そのため、一行は誤った道を進んでしまうことになる。ルーシィはみんなを説得できなかったことで、自信を失っていく。しかし、夜になり、ルーシィにどこからか一番好きな人の声が聞こえてきて、彼女はまた森に入っていく。その夜は前夜と違い、木々の動きが分かる。さらに、ルーシィはその木々の後ろにアスランが立っているのを見て取り、アスランに再会する。それは、ルーシィが心の奥底でアスランを信じていたからである。アスランとの再会は、一羽のナイチンゲールの森への導きがきっかけとなり、ルーシィのアスランを信じる気持ちによって実現したのである。

ナイチンゲールは、甘美な響きをたたえる詩歌へのあこがれを象徴する存在であり、この鳥の名は、時に「歌」や「詩」の同意語⁶ともなっている。また、ナイチンゲールは親鳥が巣の中でひなにさえずり方を教えるとされるところから、人を教育する能力の寓意として用いられる⁷こともある。ルーシィが森の中に入っていくとき、甘い香りがただよっているのはアスランの芳香を連想し、詩歌の象徴であるナイチンゲールが歌いさえずっている姿は、アスランを思い起こさせる。また、一行はカスピアン王子となかなか会えることができない。それは、アスランによって与えられた試練であり、ナイチンゲールの教育的能力をも暗示している。これらは、この作品においてのナイチンゲールの象徴性と合致していると言える。アスランは、ルーシィがアスランとナルニア国の存在を純粹に信じているかを試し、正しい方向へ導こうとしているのである。

『馬と少年』では、離ればなれになっていたシャスタ、アラビスと馬のプレー、フィンが再会を果たして旅を続けていく途中、崖の下に広がる林の合間になんともいえないようなほのかなおりが漂い、シャスタはナイチンゲールの声を聞く。シャスタはナイチンゲールの声を一度も聞いたことがなかった。月の光がそそぎ、ナイチンゲールが鳴いている中でシャスタ、アラビス、プレー、フィンは疲れ

⁶ ハンス・ビーダーマン『図説 世界シンボル事典』、藤代幸一監訳、2000年、295ページ。

⁷ 同上、295ページ。

果てて眠りにつく。ほのかなかおりが漂い、林の中で鳴いているナイチンゲールは、彼らに心地よさを与える。ここでのナイチンゲールの登場は、直接アスランへの出会いを予告するものではないが、なんともいえないようなほのかなかおりは、アスランのかおりをも連想させ彼らに安心感をもたらしている。

『朝びらき丸 東の海へ』(The Voyage of the 'Dawn Treader,' 1952)では、ルーシィたちは、東の果ての入り口で、昇る朝日の真ん中から飛んでくる鳥を見る。

And soon after that the owners of these voices could be seen. They were birds, large and white, ... Then the birds stopped their singing and appeared to be very busy about the table. When they rose from it again everything on the table that could be eaten or drunk had disappeared. These birds rose from their meal in their thousand and hundreds and carried away all the things that could not be eaten or drunk, such as bones, rinds, and shells, and took their flight back to the rising sun. (VDT pp.206-7)

歌をうたう大きくて真っ白い鳥たちは、あらゆるところに舞い降りて、ものの形をぼんやりさせ、不思議な雰囲気をかもし出している。その中の一羽が、東の果ての入り口にいる老人の口の中に、はっきり見ることができないほど明るく燃えている石炭のようなものを入れる。この場面は、「イザヤ書」6章6節の引喩である⁸。この鳥たちは朝になると、アスランのテーブルに朝食を食べるために飛んできて、だれも知らない言葉を人間の声で歌いながら、東のほうに飛び去っていく。東はアスランの国がある方角であり、アスランとの関連深さが見てとれる。さらに鳥の色である白は神聖さを印象づける。また、誰も知らない言葉で、さらに鳥が人間の声で歌っている様子は、不思議な世界の出来事であることを表している。これらの情景は、神聖な場所であるアスランの国が近づいていることを暗示している。

『ライオンと魔女』では、魔女の人質となってい

たエドモンドを救出するのに、ワシが活躍する。ワシは、『馬と少年』において、カロールメン国のラバダシとの戦いの前に飛んでいる場面にも見られる。そのワシの中で最も年老いたワシは、戦いの始まりにしか登場せず、東のほうに行き来しながらぐるぐる回って飛んでいる。ワシは、戦いにおける卓越した能力の象徴⁹である。東はアスランがいるとされている方角であり、ワシは、空から戦いの成り行きを見ているアスランのようである。また、『さいごの戦い』では、ティリアン王がアスラン到来のうわさを最初に耳にするのは、空を舞う鳥たちからである。

ここで挙げた鳥たちは、その姿、声などから畏れと喜びを喚起させるアスランを連想させ、アスランの登場を予期させている。それは、同時にナルニアのキリストのような存在であるアスランに対する安心感と憧れを抱かせている。

3. 言葉を話す鳥

『馬と少年』においては、スーザン女王とエドモンド王が助言を得る大きなカラスが登場する。カラスはスーザン女王やエドモンド王と一緒にタシバーンを脱出するための方法を考える。カラスの作戦は見事に成功する。カラスは作戦の話し合いの中で格言のようなもの言いをする。カラスが言った内容は適切な指摘であり、作品にユーモア感を与えている。スーザン女王やエドモンド王はカラスの発言に納得し、脱出するための行動に移る。

その様子を見ていたシャスタは自分の進む方角を知ることになる。その方角は間違いなくナルニアの方角であった。シャスタは、その方角に進んでいくことにより離ればなれになっていたアラビス、プレー、フィンに再会することができる。さらに、一行は、カラスが言っていた方角に向かって進んでいく。

“ Haven't we been coming a shorter way? Didn't that Raven friend of yours say this was a short cut, Shasta? ”

“ He didn't say anything about *shorter*, ” answered

⁸ Paul F. Ford, *Companion to NARNIA*. San Francisco: Harper & Row Publishers, 1983, p.54, 241.

⁹ ハンス・ピーダーマン『図説 世界シンボル事典』、493 ページ。

Shasta. " He only said *better*, because you got to a river this way. " (HHB p.136)

アラビスは、その道が近道だからカラスは勧めていたのだと思っている。しかし、カラスがその道を選んでしたのは川があるからであり、決して近道だからではなかったのである。川の水は、砂漠の旅を続ける一行にとって重要なものである。その道は最短で、決してよいというわけではなく、遠回りをすることになっても重要なものを得ることのほうが大切であることを示唆している。

他方、『魔術師のおい』において登場するカラスは、ナルニアの世界に最初に笑いをもたらした鳥である。アンドリューが動物たちに追っかけられ、倒れ込んだ姿をカラスが笑う。カラスは、動物に囲まれたアンドリューを見て「一言も話さないのでもものいうけものではない」と言う。それを受けて、他の動物と議論が続いていく。「ものいうけもの」はナルニア国の良い生物の特権であるが、アンドリューは驚きのあまりに話すことが出来ず、ナルニア国の誕生について素直な気持ちで受け入れられないため、生物たちが話している言葉も分からない。アンドリューは悪い生物の象徴となっていることが分かる。

『銀のいす』においては、ジルとユースティスを沼人パドルグラムがいるところへ導く鳥として白いフクロウが登場する。この場面は、『ナルニア国年代記物語』において、最も人間と鳥とが関わりあい、この作品の様々な要素が凝縮されている場面である。

まず、白いフクロウは、ジルとユースティスがナルニアに来て最初に出会うナルニアのものという生物である。ユースティスは、ものを言うという良い生物の特権をもったこのフクロウとごく自然に会話する。また、ナルニア国に入るのが初めてのジルは、最初ユースティスとフクロウの会話の内容がよく分からないが、フクロウが話すことに対しては別に驚いた様子は見せない。ユースティスは、ナルニア国とアスランの存在を理解しており、ジルもすでにライオンであるアスランに出会って話をしているため、動物が話すことを素直に受け入れられる。次に、ジルはこのフクロウに乗って空を飛ぶ。鳥のように空を飛ぶということは、人間の憧れであり、その行為

を実現している。最後に、人間（ユースティスとジル）と鳥（生物）が会議を開き、アスランを信じるものとして人間と鳥が対等に話し合いを行っている。

この会議では、年寄りのフクロウたちも参加する。年寄りのフクロウから、捜している王子についての話を聞き、王子の捜索について話し合う。年寄りのフクロウの話は、年配者から若者へナルニアの歴史を伝えている。この話に登場する王妃は『銀のいす』の一つ前に出版された『朝びらき丸 東の海へ』におけるこの世の果ての入り口にいるおとめのことであり、また最初出版された『ライオンと魔女』に登場する白い魔女のことも語られ、それぞれの物語の関連性が見られる。この話を聞いて、ユースティスとジルの本格的な王子捜索の冒険が始まる。特にユースティスはこの会議において、冒険に立ち向かっていく勇気と自信を得る。そして、ジルとユースティスは、フクロウたちから王子と一緒に捜すパートナーとなるパドルグラムを紹介される。最終的にパドルグラムの冷静な判断によって、ジルとユースティスとは救われ、王子を助けることが出来る。このようにユースティスとジルのフクロウとの出会いは、人間と鳥が話し、人間が鳥に乗って空を飛び、冒険物語の幕を開くというファンタジーならではの夢幻的な要素を十分に味わうことができる。

ここで登場するフクロウたちは、自分らはナルニアの他の生物と違い、夜に活動していると言っており、フクロウの特色を示している。フクロウは、夜行性の習性や非社会的な生態や嘆き悲しむような鳴き声から、否定的な象徴¹⁰とされていることもあるが、ギリシア神話では、女神アテナの鳥であり、英知をつかさどるとされているため、闇をも見通す学識や知識の象徴¹¹ともされている。白いフクロウは、白の神聖さを帯び、その学識で彼らを正しい方向へ導く鳥として役割を果たしている。白いフクロウもこの例であると考えられる。また二人は、アスランから言われたしるべを守ることが出来なかった後、フクロウに出会う。ジルとユースティスとフクロウ

¹⁰ ハンス・ビーダーマン『図説 世界シンボル事典』、366 ページ。

¹¹ 同上、366 ページ。

との出会いは、アスランからのしるべを守れなかったことに対する再び与えられた助けなのである。

ところで、カラスとフクロウは、死と関連している鳥として登場することが珍しくなく¹²、不吉な象徴であることが多い。この点では、『ナルニア国年代記物語』におけるカラスやフクロウの役割とは合致していない。カラスやフクロウは、ナルニアの世界においてはものをいうナルニアの世界における良い生物の特権を与えられているのである。

他方、『さいごの戦い』では、ワシの登場が多い。例えば、ナルニア国の歴史を振り返り、ナルニア国の終わりについて話していたとき、ワシがティリアン王にナルニア国がカロールメン人に攻め入られている様子を伝えるために飛んでくる場面がある。それを聞いたティリアン王は、ナルニア国の終わりを実感する。ワシによって、ナルニア国の終わりが明らかになる。また、カロールメン人のリシダ・タルカーンのティリアン王への攻撃を最初に気づくのはこのワシである。このワシは、ワシが持つ予知力を示しながら、善の象徴として描かれている。

さらに、今までいたナルニアの世界からまことのナルニアに入ったときにもワシが登場する。王や女王は、眼下に広がる景色を見て、自分たちがいるところが実はまことのナルニアであることに気づいていない。その時、ワシが次のように叫ぶ。

... we have all been blind. We are only beginning to see where we are. From up there I have seen it all—Ettinsmuir, Beaversdam, the Great River, and Cair Paravel still shining on the edge of the Eastern Sea. Narnia is not dead. This is Narnia. (LB p.194)

ワシの言葉に、一同は今いるところがまことのナルニアの世界であることに気づき始める。次に続くディゴリー卿の言葉で、一同は今まで知っていたナルニア世界と違うまことのナルニアにいることを確信する。

When Aslan said you could never go back to Narnia, he meant the Narnia you were thinking of. But that was not the real Narnia. That had a beginning and an end. It was only a shadow or a copy of the real Narnia which has always been here and always will be here: just as our own world, England and all, is only a shadow or copy of something in Aslan's real world. (LB pp.194-5)

一同は今まで知っていたナルニアの世界や自分たちの知っている現実世界はまことのナルニアの影かうつしの国であることを実感し、まことのナルニアこそ永遠に変わらない世界であることを悟る。

ワシは、古代ギリシアの動物誌によると、太陽を直視してもワシの目は眩むことはない、あるいは人間には近づきえない天の領域でも自在に飛翔することができるなどと伝えられている¹³鳥であり、偉大な神や英雄を表したり、神や英雄に随行する物語やイメージが必ずある¹⁴。また、ワシはキリスト教との関連性が深い鳥であると考えられる。例を挙げると、第一に、「エゼキエル書」1章5-10節に登場する「四つの生き物」の一つがワシであり¹⁵、これは、超越の表れ¹⁶とされている。第二に、ワシは不死鳥と同様、若返りの能力を持つとされているとみなされることもあり¹⁷、「詩篇」にも関連した一節がみられる¹⁸。不死鳥はまことのナルニアにいる鳥である。まことのナルニアの存在を一同に気づかせる場面にワシが登場しているのは、不死鳥と関連性があり、ルイスが不死鳥とワシに同じような役割をもたそう

¹³ ハンス・ビーダーマン『図説 世界シンボル事典』、493 ページ。

¹⁴ ジャン・シュヴァリエ、アラン・ゲールブラン『世界シンボル大事典』、金光仁三郎他訳、大修館書店1996年、1076 ページ。

¹⁵ マイケル・ファーバー『文学シンボル事典』、335 ページ。

¹⁶ ジャン・シュヴァリエ、アラン・ゲールブラン『世界シンボル大事典』、1077 ページ。

¹⁷ ハンス・ビーダーマン『図説 世界シンボル事典』、493 ページ。

¹⁸ 「詩篇」103章5節。「ワシのような若さを新たにしてくださる」(マイケル・ファーバー『文学シンボル事典』、333 ページ)。

¹² マイケル・ファーバー『文学シンボル事典』植松靖夫訳、東洋書林、2005年、246 ページ。

としていると考えられる。第三に、「ヨハネの黙示録」におけるワシである。例えば、「第四の生き物は空を飛ぶワシのようであった」(「ヨハネの黙示録」4章7-8節)や、「ヨハネの黙示録」9章13節ではワシが空高く飛びながら、地上に住む者たちに叫ぶ箇所がある¹⁹。この箇所では、地上に住む者たちに「不幸だ」と叫んでいるが、空高くからワシが叫ぶ場面は、まことのナルニアから今までの影のナルニアの世界を見て叫んでいるワシの姿を連想させる。特に『ナルニア国年代記物語』の最後の作品となる『さいごの戦い』の場面でワシを登場させているのは、聖書の最後となる「ヨハネの黙示録」21章2節とも関連性が考えられる。つまり、新しいエルサレムが永遠のナルニアと呼応するということである。

このように、ルイスが鳥に言葉を話す能力を与えたことは、鳥と人間とが対等な立場となり、鳥を通して客観的な観点から登場人物、ひいては読者に助言や忠告を与えている。すなわち、ルイスは楽しませながら教えようとしているのである。

4. 鳥の姿になったアスラン

『ナルニア国年代記物語』では、アスランはライオンの姿だけでなく、変身して登場する場面がある。例えば、子羊(『朝びらき丸 東の海へ』)や猫(『馬と少年』)などが挙げられるが、アホウドリの姿にも変身している。ここでは、アスランが姿を変えたアホウドリについて見ていくことにする。『朝びらき丸 東の海へ』において次のような場面がある。

...and at last with a whirring of wings it was right overhead and was an albatross. ... It called out in a strong sweet voice what seemed to be words though no one understood them. ... Drinian steered after it not doubting that it offered good guidance. But no one except Lucy knew that as it circled the mast it had whispered to her, "Courage, dear heart," and the voice, she felt sure, was Aslan's, and with the voice a delicious smell breathed in her face. (VDT p.187)

¹⁹ Leland Ryken, James C. Wilhoit, and Tremper Longman, *Dictionary of Biblical Imagery*. Illinois: Inter Varsity Press, 1998, p.223.

<朝びらき丸>は順調に航海を続けていたが、やがて暗闇の中に入ってしまい、抜け出せなくなる。一行は途方に暮れ、ルーシィは心の中でアスランに助けを求める。すると、一羽のアホウドリが姿を見せるのである。アホウドリは、船乗りの言い伝えによると良い前兆であり、航海の無事を願う鳥である。アホウドリのこころよい鳴き声は、一行の進むべき方向を知らせているようであり、一行はその声を疑うことなく進んでいき、無事に暗闇を脱出することが出来る。

ルーシィは、アホウドリが“Courage, dear heart”と呼びかけているように感じ、そのこころよい響きがアスランの声であると分かる。聞き覚えのあるアスランの声に、ルーシィは親近感と安心感を得て、勇気を与えられる。ここでは、アスランが鳥に変容して、一行の危機を救ったのである。そのアホウドリが現れるきっかけとなったのは、ルーシィのアスランを信じる心である。また、一行もアホウドリのこころよい声の導きを信じて進み、暗闇からの脱出となったのである。

ルイスはこの場面で、アホウドリを射殺してしまい、災いが降りかかり、数々の恐ろしい目にあう老水夫の罪をテーマとしたサミュエル・テイラー・コールリッジ(Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834)の詩「老水夫の歌」(‘The Rime of the Ancient Mariner,’ 1798)を意識して用いている²⁰。ルイスがこの詩を意識して用いたのは、この詩に多く見られるキリスト教的モチーフを踏まえながら、生と死の問題、罪の意識、信じる心に関して明確に示すためだったのではないか。

まず、生と死の問題である。老水夫はアホウドリを射殺してしまう。その後、船に乗っていた他の人々が死んでいく姿を目の当たりにし、老水夫は生と死の狭間にいることを実感する。一方、ルーシィら一行は嵐にあい、死と向かい合わせにいたが、アホウドリの導きによって生の世界へと戻っていくのである。次に、罪の意識である。老水夫はアホウドリを射殺してしまい、罪の意識に苦しみ続ける。しかし、

²⁰ David Colbert, *The Magical World of NARNIA*. London: Puffin Books, 2005, p.141.

『朝びらき丸 東の海へ』の場合は、現れたアホウドリ（アホウドリ）の声を聞き分け、ルーシはアスランの声をであることを察知する。これは、信じる心の重要性に関連している。最後に、信じる心についてである。「老水夫の歌」に登場するアホウドリは、キリストを象徴するものとして用いられている。それを射殺してしまうことは、神を信じることに対する否定的な態度を表し、さらに、自分自身をも信じられない心理状態であったことを表している。しかし、最後になり、老水夫も神の恵みを知り、信じる心を取り戻す。

『朝びらき丸 東の海へ』では、アホウドリ（アスラン）を信じること、つまりキリストへの信仰心が一行のすべての人々を救ったのである。これは、信じる心を持つことの大切さを示している。アスランはいつも見守り、応えてくれる存在であることが明らかとなる。この物語展開は、「老水夫の歌」と全く反対の結末を設えることによって、生と死の問題や罪意識について提示し、信じる心の重要性をより強く表出させているのである。

『朝びらき丸 東の海へ』のアホウドリは、やがて誰も気がつかない間にどこかへ消えてしまう。これは、すでに指摘したように、ライオンのアスランが誰にも気づかれることなく、立ち去っていく様子と同じである。

この場面では、アスランがアホウドリに変身して現れることで、「老水夫の歌」のキリストを象徴として描かれているアホウドリが連想される。アスランが本来のライオンの姿ではなくても、いつもそばにいて見守り、応えてくれ、生きる勇気を与えてくれる存在であることが分かるのである。

5. 「鳥」のようなタシの神

『さいごの戦い』において、鳥のような姿をしたタシの神が登場する。最初、どこからとなく異様な臭いがただよってくる。このにおいは、死んだものの臭いに似ている。近くに鳥が死んでいるかもしれないとユースティスが辺りを見回し、みんなも臭いの変化を感じていたそのとき、タシが姿を現す。

But the deathly smell was not the smell of smoke.
Also, this thing kept its shape instead of billowing

and curling as smoke would have done. It was roughly the shape of a man but it had the head of a bird; some bird of prey with a cruel, curved beak. It had four arms which it held high above its head, stretching them out Northward as if it wanted to snatch all Narnia in its grip; and its fingers—all twenty of them—were curved like its beak had long, pointed, bird-like claws instead of nails. It floated on the grass instead of walking, and the grass seemed to wither beneath it. (LB p.92)

タシは、鳥のような頭とかぎ爪を持っていることから鳥の姿を連想させ、その様々な特徴は、アスランと対照的に描かれている。

第一に、アスランは芳しいかおりをもたらしているが、タシは死んだ鳥のような悪臭を放っている。第二に、アスランの姿を表す色彩は神聖さを象徴する金色で描かれていることが多いが、タシは陰気さを連想させるうす黒い色をしている。第三に、アスランは堂々とした姿で歩いているのに対し、タシはふわふわと空中を浮いて動いている。これは、タシがアスランのような存在感のある生物ではないことを表している。‘Tash’の語源は、古い語で「汚点」や「しみ」のことであり、道徳的責任や罪の意味と関連している²¹。このようなことから、タシは『ナルニア国年代記物語』において、善の象徴であるアスランに対して悪の象徴であると言える。また、タシの気配を察知したのも、タシを呼び出したのはリシダ・タルカーンであることに気づいたのもワシである。ワシは、特に『さいごの戦い』においても善の象徴として描かれている鳥である。タシとアスランとの並置に加え、タシとワシとの並置もまた、善と悪との対照を際立たせている。

タシの姿は、人間のようであるが、頭やかぎ爪は猛禽類である。これは、エジプト神話に登場する神であるホルスやラーを連想させる。ホルスは、天空神と想像され、タカの頭をしており、全エジプトの支配者²²の神である。さらに、ホルスはライオンの

²¹ David Colbert, *The Magical World of NARNIA*. p.163.

²² マンフレート・ルルカー 『エジプト神話シンボル事典』、山下圭一郎訳、大修館書店、1996年、66-67ページ

皮を頭にかぶっていたという伝説²³もある。これは、『さいごの戦い』で、偽アスランを装い、ライオンの皮をかぶっていたロバのパズルと関連性がある。一方、ラーは古王国時代からの国家神で、聖都ヘリオポリスを信仰の中心とする太陽神・創造神²⁴であり、ホルスと合体し、自分の人間の体に、ホルスからタカの頭をとってつけた神²⁵である。ホルスとラーはともにタシの姿と類似している。

さらに、タシはカロールメン人が信仰している神である。カロールメン人は『ナルニア国年代記物語』において、イスラム系民族を連想させる。

このようなことからタシはイスラム圏であるエジプトに関連し、古代エジプトとの観点から言えば、イスラエル民族がエジプトから脱出する聖書の「出エジプト記」との関係性も無視できない。「出エジプト記」において、モーセが彼らを率いてエジプトを脱出したのは、ラメセス 2 世²⁶時代ではないかという説が有力である²⁷。当時のイスラエル人は、奴隷として駆り出され、「ラメセス」(おそらく首都ペル・ラメセス、現在のカンティール)および「ピトム」(位置不明)の建築工事で働かされていた²⁸とされている。ルイスは、このような聖書的背景とイスラム系民族に対する否定的な印象から、イスラエル人の苦しみを描き出しそうとしたのではないかと考えられる。また、民族の脱出に関しては、『さいごの戦い』の後半において、アスランに選ばれたものがそれまでのナルニアを脱出し、まことのナルニアへ向う場面と呼応している。

ージ。

²³ マンフレート・ルルカー 『エジプト神話シンボル事典』、83 ページ。

²⁴ ベルナデット・ムニュー 『ラメセス 2 世』、吉村作治監修、南条郁子、福田ゆき訳、創元社、1999 年、25 ページ。

²⁵ マンフレート・ルルカー 『エジプト神話シンボル事典』、117 ページ。

²⁶ 第 19 王朝のファラオで前 1279 ~ 前 1213/1212 まで統治 (ジョン・ボウカー編著 『聖書百科全書』、荒井献、池田裕、井谷嘉男監訳、三省堂、2000 年、47 ページ)。

²⁷ ベルナデット・ムニュー 『ラメセス 2 世』、68-69 ページ。

²⁸ ジョン・ボウカー編著 『聖書百科全書』、47 ページ。

他方、ラメセス 2 世と神々の信仰との関係から見ると、自分の即位名を「ラーに選ばれた者」と追加したり²⁹、ラメセス 2 世の戴冠式を表した浮き彫りには、ラメセス 2 世に二重王冠を授けたり、神王権を譲り渡すホルス神が描かれている³⁰。しかし、エジプト側に出エジプトの記録はなく、また聖書にもラメセスの名はない³¹が、タシの姿は、「出エジプト記」に関連が深いと考えられるラメセス 2 世と結びついていたかもしれない。

ルイスは、タシの神において、奴隷問題、人種差別問題、民族問題、キリスト教とイスラム教などの宗教対立の問題などを、イスラム圏に対する無意識の偏見にもかかわらず、ヨーロッパ、帝国主義社会への批判をも物語に注ぎ入れていると考えられる。

ところで、タシの神の出現は、カロールメンの兵士エーメスの改宗に影響を与えている。エーメスはタシの神を信じていたが、アスランと出会うことによって、エーメスが本当に求めていたものはアスランであることを悟る。エーメスに会ったアスランは次のように言う。

Not because he and I are one, but because we are opposites, I take to me the services which thou hast done to him. For I and he are of such different kinds that no service which is vile can be done to me, and none which is not vile can be done to him.

(LB p.189)

タシはアスランと対照的であり、全く別の存在であることがアスランにより示される。エーメスは、強い信仰心を持っていたことにより、アスランによって正しい方向へ導かれ、本当に求めているものを知ることができ、アスランへの深い信仰を得たのである。ルイスは、タシをアスランと対照的に描くことによって、アスランの偉大さと絶対性を明確にし、また、エーメスのような異教徒に対して一種の救いの道を提示していると考えられる。

²⁹ ベルナデット・ムニュー 『ラメセス 2 世』、85 ページ。

³⁰ 同上、47 ページ。

³¹ ジョン・ボウカー編著 『聖書百科全書』、47 ページ。

このようにタシの神はこれまで描かれてきたナルニアの鳥とは全く異なる性質を持っているが、ルイスは、タシを鳥のような姿をした生物とすることによって、様々な問題を織り込みながら、善悪の差異を明らかにし、真実な信仰とその究極の追究対象であるアスラン、つまり神の存在を示唆している。

結論

『ナルニア国年代記物語』の各作品にはさまざまな形で鳥が登場している。すでに見てきたとおり、ナルニアの世界で登場する鳥は、現実世界の同じ名で呼ばれている鳥とは異なっている。作品に描かれている鳥たちは、身近に見かける鳥たちのようでありながらも、不思議な色をし、美しい声でさえずり、すばらしい香りを漂わせ、人間と同じように話し、鳥の歌声、姿、行動などからみても普通の鳥と違いがある。また、それぞれの鳥たちは、作品中においてさまざまな役割を果たしている。

第一に、超越性の象徴である鳥たちは登場人物たちを夢幻的な別世界へと導いていく。第二に、鳥たちによって作品の中心的存在であるアスランとの出会いが予期され、アスランの存在を再認識しながら、アスランに対する安心感と憧れを抱かせる。第三に、鳥たちが人間と対等に話すことによって、人間の姿を客観的に捉え、鳥たちの言葉は、アスランからの言葉のように助言や気づきとして登場人物に影響をもたらす。第四に、アスランが鳥に姿を変えて登場することにより、アスランは本来の姿で現れないものの、登場人物をいつもどこかで見守り、危機的状況から救い出し、励ます存在であることを明確にし、ルイスの根底には強い信仰心があることを示唆しているのである。第五に、まさしく鳥の姿をした生物であるタシの神は、それまで述べてきた鳥の役割とは全く異なり、善の象徴であるアスランとは正反対の姿で悪の象徴として描かれている。これは、善と悪との差異を明らかにしながら、その背景にある様々な社会的問題を暗示させている。

『ナルニア国年代記物語』は、様々な鳥の登場によって成り立ち、様々な鳥たちは、タシの神を除き、ナルニア国のキリストを象徴しているアスランのもう一つの姿、もしくはアスランの使者であると考え

られる。一方、タシの神は、アスランと対照的に描かれることによって、この物語の中心的主題である善と悪との相違を前景化させながら、アスランの存在を明確にする効果を果たしている。要するに、『ナルニア国年代記物語』における鳥のシンボリズムは、ルイスのキリスト教信仰が意識的または無意識的に作品に表出している役割を担っているのである。

(Received : September 30, 2006)

(Issued in internet Edition : November 1, 2006)